

おかげさまで 館報100号を迎えました



「館報」で振り返る
教育記念館のあゆみ



教育記念館HP

館内案内

- 5F 会議室、教育諸団体
- 4F 教育諸団体、収蔵庫
- 3F 郷土先賢室、教育諸団体
- 2F 教育記念室、会議室、ひとつくり財団、収蔵庫
- 1F ギャラリー、受付（管理事務室）
- BF 駐車場、他

入居団体一覧

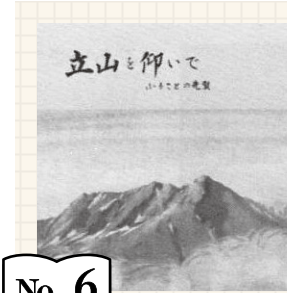


近代教育百年を記念して設立

富山県教育記念館は、昭和52年（1977）7月、教育百年を記念して建設されました。明治5年（1872）、学制頒布されて以来の近代教育の大きな流れを記念し、研究・展示などの活動を通じて教育の更なる発展に寄与しようとするものです。建設資金は県民の拠金と県の助成により賄われ、県・県民・教育界の三位一体の運営がはかられました（館報第1号より）。



No. 1



No. 6

刊行物の作成始まる

立山を仰いで
—ふるさとの先賢—
（青少年向け郷土人物誌）
1～4集



教育記念館会議が開催される

—80年代の富山県教育を考える—
（S54.11～S60.6まで5回開催）

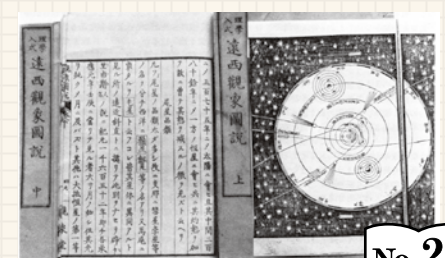


No. 19

舟木文庫に見る

ハレー彗星

舟木文庫をはじめとする寄贈された資料や古い教科書等を所蔵しています。資料は広く皆さんに活用されています。



No. 21

新しくなった常設展示室

創立10周年を記念し、高志会館の新築に合わせ、連携・活用しやすいように改装拡張工事が行われました。2F教育記念室では、ジオラマで寺子屋や明治の遠足を再現するなど、より見やすく分かりやすい展示になりました。



（HPもご覧ください）

No. 26

館報の内容（現在は年に2回発行）

- ・教育時評
- ・展覧会とその様子や声
- ・郷土の先賢顕彰者紹介
- ・わが校の歴史から
- ・催し物の案内 など（最近の館報をご覧ください。）



第1回「富山県中学校美術」展

県内全ての中学校86校より出品されました。令和4年度は33回を迎えます。



No. 34

「学童集団疎開」展

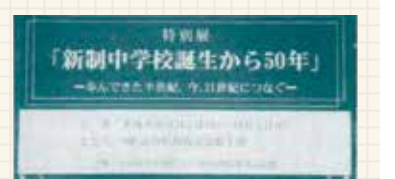
—戦火を逃れて富山にきた子どもたち—（終戦50周年）



No. 45

「新制中学校誕生から50年」展

—中学校の半世紀を振り返り、21世紀の教育につなぐ—



No. 49



No. 99



とやまの教育史料「青い目の人形」展

県内に現存する「青い目の人形」7体を一堂に展示しました。一番右のお人形は当館で保管し常時展示しています。

No. 84



第11回「子どもの目・自然不思議発見写真」展

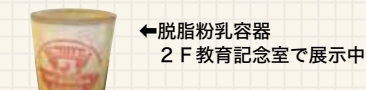
1Fギャラリーでは、子どもの目写真展をはじめ、年間を通して展覧会を開催しています。県内の子どもたちの創造性や夢を育む場、みんなで本県教育を考える場として利用されています。

No. 71



「富山県の学校給食90年の歩み」展

「健康・スポーツ部会」で調べ、まとめたものを刊行し、展示しました。



←脱脂粉乳容器
2F教育記念室で展示中

No. 69



「自然に育まれたとやまの教育」展

「特別部会」で調査研究し、まとめたものを刊行し、展示しました。

No. 64



常設展示室リニューアル

2F教育記念室にPC検索コーナーや映像コーナーを新設しました。

また、「郷土先賢部会」でまとめた先賢の業績をより明るく見やすく展示するため、3F郷土先賢室の Колトンや展示ケースを一新しました。

（HPから過去の顕彰者を検索できます）

郷土の先賢

No. 61

新しいスタート
平成15年の4月1日から、財団法人「富山県教育記念館」は、財団法人「富山県ひとつくり財団」という新財団のもとに再出発をいたしました。…これまでの事業はもちろん継続しながら、常に新しい方向を探りながら富山県教育の充実・発展に微力を尽くしたいと思います。（館報第61号より一部抜粋）

No. 63

オープニングでにぎわう「マセマティカル・ワールド」展

数学者の秋山仁先生が中心となって開発・製作された体験型大型教具を中心として体験できる展示です。現在は「さんすうワールド展」として開催しています。



新設 ノーベル賞紹介コーナー
田中耕一さんの受賞を記念し、ノーベル賞を身近に感じられるパネルやレブリカの展示が始まりました。

No. 97



「肖像画で見る郷土の先賢」展

当館で所蔵している肖像画100点の中からテーマに沿って選び展示しました。

No. 81



「富山県小学校教育140年の歩み」展（後編）

「教育資料部会」で調べ、まとめたものを刊行し、展示しました。

教育博物館としてのコンセプト（構想）

常設の展示施設は教育記念室と郷土先賢室の2室とし、史資料の収集を図るとともにテーマを設けて研究し、その成果を展示・刊行していくという基本方針が決められた。…現場の先生方を当館の専門員に委嘱しチームを組んで研究にあたり、記念室および先賢室の展示や刊行物の作成にあたった。1テーマに2年、3年と時間をかけることにより、専門の学芸員にはひけを取らない成果を上げることが出来た。（館報第82号より一部抜粋）